

メジャーリーグで活躍するイチロー（マリナーズ）は以前「ファンを圧倒し、選手を圧倒し、圧倒的な結果を残すのがプロ」だと語っていた。プロの定義はさまざまだが、アマチュアに対して圧倒的な力の差を見せつけるのがプロだと考える人は多い。

そういった観点からすると、北陸電力の榎田亮介をプロだとは言いにくい。昨季の日本リーグでの得点はわずか1点。今季も日本リーグ11試合で無得点である。選手を得点だけで評価するというのも乱暴な話だが、残念ながら圧倒的な数字は残せていない。

しかし、榎田亮介はプロフェッショナルである。北陸電力の「社外選手」である榎田は、個人でスポンサーを集めて活動している。個人競技のアスリートに似た手法と言っている。

ドイツ・ブンデスリーガ3部のピルナで活躍中に左ヒザ関節脱臼による複合じん帯損傷という大ケガに見舞われた。日常生活への復帰も難しいと言われた中、2年間のリハビリの末に北陸電力でプレーするようになった。人一倍の苦勞を背負い、ハンドボール選手として死の淵から這い上がった男は、新しいプロの形を示そうとしている。

vol.62

続・送球の昂

～榎田亮介（北陸電力）が示す、新しいプロの形～

今月はHonda、Honda熊本を経てドイツに渡り、昨シーズンから日本リーグ復帰を果たした榎田亮介（北陸電力）の示すプロフェッショナルの形にスポットライトを当てた。

熱意だけではスポンサーはつかない

トッププレイヤーでもない榎田が複数のスポンサーを獲得しているのを、周りには不思議に思う。余程の熱意がゴリ押しか、それともマイナースポーツの選手を支援するBLUETAGに所属しているからうまくいくのか。

「最初はそれこそ熱意だけでいい。でも情熱だけではスポンサーは獲得できません。何度か失敗を繰り返すうちに、当たり前のことに気づいたんです。スポンサーになろうかという企業は、僕だけを見ていてではなくて、僕の背後にどれだけの人がいるかを見てくれるんだと。」

「僕に1つの品物を提供するだけで、2人のお客さんがそれを買ってくれるのであれば、企業にとっては投資した意味

がある。スポンサーというのは寄付じゃないから、費用対効果が求められるんですよ。そこでビジネスとして成り立つから、お金なり物品提供があるわけであって。」

例えば、彼が物品提供を受けている健康デザインの場合ももとはヒザのリハビリのために体にいいものを摂ったから、ということで紹介されたのがきっかけだった。そこで先方と意気投合したこともあり、ウドズ・オイルを提供してもらえるようになった。

「物品提供を受けているんだから、ウドズ・オイルを使った料理をブログで紹介するのは当たり前のことです。向こうは「紹介してね」という程度で、義務とまでは言わないけども、スポンサーに対してこれくらいはしないと」



ドイツ時代も背負った94番には愛着がある



講演や講習会では、全スポンサーのロゴが入ったオリジナルジャージを着て指導する

「は」と考えるようになってからは、スポンサー獲得もスムーズになったという。「応援してください」と媚びへつらう一方で、好意を示す企業に対してむしろ取るような行為を繰り返す競技では、未来はない。自分たちがなにを返せるのかをわかつたうえで、対等なギブ&テイクの関係を築くことが、世界を広げる一歩となる。

自分を売り込む

スポンサー獲得の話からもわかるように、榎田は相手がなにを求めているかを感じることには長けている。Honda時代、当時の上司から「お前の直属の上司のほうもひとつ上の人が、なにを求めているか考える」と言われたことが、大きなヒントになったという。日本リーグへの復帰をめざしていた2年前も、テストを受けるチームのメンバー構成を考慮して、売り込むポイント

トを少しずつ変えていった。結局、北陸電力への入団が決まったが、その時に売り込んだのは「6:0DFの3枚目を守る能力と、左利きのバックプレイヤー桜井渉の休憩時間を作る役目」だった。ここで榎田の経歴を知る人間にとっては、いささかの疑問が生じる。Honda時代はベンチ入りもままならなかった。Honda熊本では、DFは2枚目しかやっていない。ドイツでは5:1DFのトップだった。6:0DFの3枚目としての経験はない。やったこともないのに売り込むというのは、考えようによっては図々しいとも取れかねない。だが、榎田の中にはそれなりの根拠があつてのことだった。

「原点にあるのはドイツでの経験です。185cmの僕は、日本では大きい部類ですけど、ドイツでは小さい。だからピルナではOFは右サイド、D

Fではトップをやれと言われてたんです。初めての海外で、今までやったこともないポジションをやれと言われて、初めはパニックになりました。」

「適性や過去の経歴は関係ない。求められる役割を果たさなければ、チームからは戦力外とみなされる。榎田は生き残るために、新しい役割を覚えようとした。トップDFの第一人者である辻昇一（現・日体大女子監督）にメールを送り、トップの役割とはなにかを教わったりもした。

必死の取り組みが実を結び、榎田は右サイドとして、またDFではトップとして、仲間の信頼を勝ち取った。

実際に、出場時間は限られ



試合直前でも大西太一と個別でアップをする

てはいるものの、榎田は6:0DFの3枚目として役立っている。ベンチにいても、若い石塚正人らに積極的にアドバイスを送っている。大黒柱の神田友和の負担を少しでも軽くしようという配慮が、随所に感じられる。

謝りすぎない

左ヒザは回復途上とはいえず、まだイメージどおりに動けないことも多い。試合ではスカッと抜かれてしまうこともある。3枚目が真ん中を抜かれるのは、本来ならば一番やられてはいけない部分である。

だが、そんな時にも榎田はひと言「すまん」と言っただけで切り替える。随分あっさりとした謝り方にも見えるが、これにも榎田なりの理由がある。

「僕も昔は、とにかく謝り倒していました。でも、なんでもかんでも謝っていたら、だれの責任かわからなくなるから、状況が改善されません。DFが悪かったのか、GKが悪かったのかを短時間ではつきりさせていかないと、試合中に修正できません。」

それに、この世界は「なめられたら終わり」というのもありますから。失敗した過去

に意識を残したり、「次もミスするんじゃないか」と未来のことを気にするよりは、今、堂々とプレーすることの方が大事ですからね。」

元フランス代表の外国人選手に怒られたっばなしだったHonda時代とは違う。かと言って、虚勢を張っているように見えたHonda熊本時代の雰囲気とも、また異なる。

「今は「たかがハンドやから、失敗しても殺されはしない」と思っています。意識して堂々と振る舞おうというのもありですけど、いろんな経験をしたから、今は自然とそうになっているのかもしれない。動けなくて、相手に抜かれてしまうのも今の自分や、声でしか貢献できないのも今の自分。それもこれも全部ひたひたの僕なので、ありのままを見てくださってことです。」

もちろん、現状の自分に甘んじるつもりはない。練習の2時間前からウォーミングアップをして、練習後も大西太一とトレーナーと個別でトレーニングを重ねている。練習の5分前に来て、いきなり動ける若手とは、体の状態が違う。それでも、今の自分にできる100%を日々積み重ねて、榎田はコートに立っている。

ハンドボールの保険を作りたい

多くのスポンサーを得てい

る榎田だが、残念ながらそれだけでは活動をまかなえない。だから普段は営業マンとしても働いている。現在の肩書はトライマックス福井支店のファイナンシャル・アドバイザー。損保代理店の営業マンである。もともと福井支店があつたわけではなく、榎田が福井を拠点に活動するというところで、便宜上福井支店という名前がついただけ。従業員は榎田1人である。

「エコショップネットワークの泉三紀夫社長は、もともとが法人向けのコンサルティングをしていて人で、太陽光発電の会社も持っているけど、損保の代理店も持っていたんです。」

だから最初の1年はエコショップ預かりという身分で、両方の営業研修を受けてきました。形あるものを売って太陽光発電の営業と、保険という形のないものを売って営業。2年目からは適正を判断して活動することになりました。」

榎田自身が保険に関心を持ったのは、ドイツで手術をした時だった。チームが保険に入っていたため、幸いにも左ヒザの手術費用は個人負担にならなかった。



ベンチから声をかける榎田

「僕の場合は助かったけど、そういう危ない状況はハンドボール界にはまだ多いんです。たまたまケガをしなかったから、知らずに通りすぎていくだけで。」

榎田が思い描くプランのひとつにハンドボールの保険がある。選手が教える講習会はこれからもっと盛んになるだろう。そうすると、講習会で生徒がケガをするリスクも増えてくる。そういった不測の事態に備えて、受講者が保険に入っておけば、治療費の負担で揉めることはない。

現に日本バレーボール協会が認定するバレーボール保険といったものが存在している。そのハンドボール版を作れたらと、榎田は考えている。

ドイツ・ブンデスリーガの下部には、チームからサラリーをもらいながら、仕事をしている選手もいる。サラリーだけで競技が続けられるにこ

したことはないが、プロとしてさまざまな形があってもいいのではないだろうか。ユニフォームにしても、一部分を個人スポンサーと開放することで、選手個々の営業活動を促し、そこから新たな展開が生まれたらおもしろい。ひとつの会社だけでなく保有する選手の数には限度があるので、社外選手が増えることはリーグ全体のレベルアップにもつながる。

榎田の取り組みは、選手個々の寿命を伸ばすための新たな手法というだけでなく、日本のハンドボール界が生き残るためのヒントとも言えるだろう。

繰り返しになるが、榎田亮介はプロフェッショナルである。所属チームに依存しないでも、現役であり続けられる可能性を示した、プロフェッショナルである。

榎田の公式HP「左腕坊主」
<http://www.sawanbozu.com/top/index.html>
ツイッターID @KushidaRyosuke